

池田文書の研究 (46)

医師の書簡 (その5)

池田文書研究会

[71] 高階経徳関連の書簡

高階経徳は典薬寮医師で明治中期まで宮内省の侍医として残った唯一人の漢方医。経徳の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』上巻に38通掲載。未掲載分を記す。

39 明治 年 月 日 (3527)

(電報文の写し)

ハツカノテガミウケトリタ、ニジュシチニチ、ノ、ゴヤウダイシユニテヘンジラ。イダシタ。ユヘ。ゴシレイ。オ。マツ。ソノゴ。カツラノミヤ。マズ。オンヨロシキカタニテ。タマイマゴキトク。ノゴヤウダイアラセラレズ

(注) 本電文は京都御所に御住居の桂宮(仁孝天皇第3皇女淑子内親王。明治14年10月没。享年53)を治療中の侍医高階経徳から池田謙齋宛に出されたものと思われる。句読点は原文のまゝで内容は「20日の手紙受け取った。27日の御容態書にて返事を出した故御指令を待つ。その後桂宮先ず御宜しき方にて、只今御危篤の御容態あらせられず」

40 明治 年9月6日 (843)

御請

御口上之様難有拜見致候、其上々様にも益御機嫌克御入被遊候程御目出度御悦申上候、左様に候へは昨日ハ御殿様御出いたゞき何共々々恐入候御事に御座候、乍恐御礼厚く申上候、さて只今ハ御人いたゞき御心入さま之御佳肉之御見舞いたゞき難有早速にいたゞき候はんと有かたかりまいらせ候、御蔭さまにて本日も格別之変りも御座なく、同様に致居候まゝ乍恐御安心ねかひ上候、何れ快

方次第参上万々御礼可申上候、右御請のミ代筆にて申上候

九月六日

高階

↗

池田様 御奥御次中

↗

41 明治(14)年1月16日 (2143)

拜啓、時下酷寒之候弥御安清賀上述候、此程御許大先生御機嫌能御帰東之由拜承、早速御伺可申上本懐之所、御無音相成此段奉拜謝候、随て此鹿魚甚々軽少之至ニ候得共拜呈仕度何卒貴方より可然御取計らひ奉祈候、先は右御尋問旁々愚書拜伸候、勿々

一月十六日

高階経徳留守宅 徳田周輔

池田様 御執次中

42 明治 年8月10日 (3039)

證

一、御状 一通

一、洋箱 二箇

右之通正ニ落手仕候、唯今経徳義出勤中ニ付、尚婦宅之上早々可申聞候也

八月十日

高階経徳奥 和田要文

池田様 御使者迄

[72] 高階経本の書簡

高階経本は典医高階家の一族。侍医を勤める。経本の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』上巻に7通掲載に付き省略。

[73] 高橋正純の書簡

高橋正純は大阪府病院長勤務後高橋病院開業。

正純の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に2通掲載に付き省略。

[74] 高松凌雲の書簡

高松凌雲は緒方洪庵・ヘボンに西洋医学を学ぶ。同愛社を設立し貧民救済事業の先駆者。凌雲の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に2通掲載に付き省略。

[75] 高山紀斎の書簡

高山紀斎は米国へ私費留学し歯科を学ぶ。日本初の歯科医学教育機関・高山歯科医学院（東京歯科大学の前身）を創立。侍医局勤務。紀斎の書翰は『東大医学部初代総理池田謙斎』上巻に3通掲載に付き省略。

[76] 竹内正信の書簡

竹内正信は蘭方医竹内玄同の子息。字は玄庵。侍医を勤める。正信の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』上巻に38通掲載。未掲載分を記す。

39 明治 年8月6日 (3157)

御手紙拜見、少々御不快之由折角御保養専一奉存候、只今回診掛ニ付万事其佗御豫申置候、いつれはより別段御答可申上候様可仕候、匆々不乙

八月六日

↙

謙斎様 貴酬

(?)
玄庵

↙

[77] 竹内雄平の書簡

竹内雄平は明治18年頃東京上六番町にて医業開業。

1 明治 年6月17日 (1889)

昨夜態々御枉車被成下深奉謝候、早速如御教示灌腸仕候処、六合斗も入りしと覚敷頃最早肛門より逆流致、且患者も苦痛之容子ニ見得候故相停候処、直ニ糞色之液汁ニ変し其中ニ二三片之軟便相混候、外ニ瓦斯も少々相発候、再ひ行候処はも前件之通り、併し瓦斯ハ最初より多量ニ排泄之様ニ

見得候、其後全腹少々弛ミ三時間斗安眠致候、十二時頃より醒眠、今曉ニ至又々全腹膨満病楚頗煩午前五時頃より醒今頃ニ至ル迄嘔吐無能、昨夜御覽被下候通りニ御座候、右容体申上候間御高案被成下度奉願候、謹言

六月十七日

竹内雄平

池田先生 閣下

[78] 竹山龍保の書簡

竹山龍保は竹山屯の一族で新潟熊ノ森に住む医師。

1 明治 (17) 年1月14日 (1967)

(封筒表) 東京駿河台北甲賀町九番地

池田謙斎様 貴下

越後西蒲原郡熊ノ森村 竹山龍保

(封筒裏) ↙ 一月十五日投函 (切手二銭)

(消印 長岡 越後一・一六)

(東京一七・一・一九)

謹奉賀新年候、先以御尊館皆様御静康御鶴齡被遊欣然奉恐賀候、随て蝸屋一同無事加年仕候、扱て客年中ハ御厚庇ヲ蒙り奉拜謝候、尚不相変御眷顧奉仰上候、于茲年甫之御祝詞申上度余は期永陽候、謹言

一月二日

竹山龍保

池田謙斎様

二伸、其後は意外之御疎遠申上御厚情ヲ忘却セシニ無之候得共不行届乍思延引仕候、將亦田舎ニテハ当一月ヲ以テ年中第一ノ繁忙点ニテ万方え不沙太何共無謝辞候次第ニ奉存候、祐彦⁽¹⁾義御多事中モ不顧御厄介御頼申上亀縮之至り奉万謝候、何分ニモ御厚庇奉仰上候、近頃徴兵例御改正ニ際し同人義ハ丁卯正月生ニ御坐候間丁年迄ニ十八条ノ場合ニ至り間敷哉ニ心配仕候、何卒御責督勉強為致被下度奉願上候、右ニ付テハ何トカ御名案も無御坐候哉、御添慮偏ニ奉願上候、過日は如何敷塩鮭拜呈仕候処御謝辞ニ預り却て赤面之至り奉存候、御後室さま始皆様御機嫌克被遊候哉、意外之御不沙太野母同様申上候、御立腹無之様御茶話奉願上候、西野御老母さま⁽²⁾ニモ益御壮栄不斜喜祝此事奉存候、于茲

疎遠ヲ謝し度書洩ハ後音可申出候、早々頓首
一月十四日

- (1) 竹山裕彦 竹山本家竹山裕トの次男。
- (2) 西野御老母 池田謙齋の実母入沢はま、新潟西野村に住む。

2 明治29年6月9日 (1968)

(封筒表) 東京神田区駿河台北甲賀町九番地

池田謙齋様 尊下

(封筒裏) 封 新潟出先ニテ 竹山龍保

(消印 武□□□年六月十一日□便)

謹啓、益々御清福奉拝賀候、陳は去ル六日西野入沢様へ診往仕候、御内政さま⁽¹⁾御伺申上候当日は近頃之機嫌宜敷日ト申事ニテ御容体之御嘶し御居^(ママ)動ニ於テ異状無之候、即廿日斗り以来左側胸部前後面ヲ通シテ攣痛ヲ覚ヒ、左側腿部ノ后側坐骨神経之経遷部ニ於テ殊ニ痛ミ下腹攣痛子宮病之感覺有之候御嘶ニ有之候、常ニ御肥満家ニハ無之候へ共随分御瘦之方ニテ小々結膜炎モ有之、舌苔アリ脈搏七十熱候ナク頭痛なく大便三日ニ老行位食餌平常之如ク、頸腺肘腺共ニ肥大ナク咽喉又タ異状ヲ不見外観総テ病疾ヲ認メス、唯タ御病氣アル者トシテ之ヲ診スレハ稍結膜ノ充血ト小シク眼光鋭利ナルカ如ク考ラレ候ノミ、他ノ人ヨリ精神ノ変状有之哉ノ忠告ヲ受ケ自身ニテモ御主人⁽²⁾之御病氣ヲ案事候余リ少ク精神之不明ナル哉ニも自覚候間先ツ主人ノ病氣ハ余義ナキ処、之ノ上心配スル事ヲ廢シ注意シテ留主ヲ守ル積リナリ云々ト御本人ノ御嘶ニ御坐候、小生ハ御本人始皆様へ御心配之余リ少敷神経之疲レモ有之候間静カニ御保養可然旨申上置候

処方ニ 硫酸苦土八・〇、臭素加里三・〇、沃土加里〇・八、橙皮舎り別八・〇、水 右壺日量三回ニ分服

右之通差上候処、小生ノ実弟外科の疾病ニテ新潟病院入院中去ル八日手術トノ事ニテ出港、明日帰宅ノ上ハ尚御診察可申上候心得ニ御坐候、昨八日入澤茂様へ御伺申上候テ小生ヲ御見覚ヒ有之候哉否ヲ御伺申上候へ共一向ニ御応答無之、只タ仰臥ニテ直視老時間余罷居候へ共同様ノ次第ニテ折々

両手ヲ揉デ貫ヒ度哉ノ様子ニテ両手ヲ胸部へ当て或ハ伸ハシ候事ニ御坐候、兩三日以来ノ体温表ヲ見ルニ午前八時七度八九分午後八度八九分脈搏百十動ト有之候ヒシカ小生ノ診セントキハ午後四時頃ニテ脈搏百廿二動体温八度九分有之候、尤モ午前ハ余程精神発動手足ヲ転倒シテ（但シ仰臥ノ低ニテ）午后ハ幾分其ノ疲労モ有之シナラントノ事、兩三日以来感冒ノ気味ニテ飲食モ減シ候故カ全身疲瘦致サレ候^(ママ)トノ事ニ御坐候、其割ニ前額ハ熱寒無之モ頸動脈ノ搏動ハ著ルシキ事ニ御坐候ヘトモ割ニ心臓部ノ搏動ハ甚タシカラズ、昨日モ水銀蒸ノ塗擦致シ候趣キ昨日迄ハ随分流涎アリシモ今日ハ無之トノ事ニ御坐候、右序ニ申上候、西野御内政さまノ御容体ハ尚再診ノ上申上度候、乍憚御北堂へ宜敷御茶話奉願上候、早々拜具

六月九日 新潟病院内ニテ 竹山龍保
池田謙齋様 尊下

- (1) 内政様 入沢家当主入沢茂の妻かつ。
- (2) 御主人 入沢家当主入沢茂。精神を病み、竹山屯の経営する新潟病院に入院するも、本書簡発信の日即ち6月9日に没。享年48。

3 明治 年3月17日 (1966)

一翰呈上仕候、御内政さま春來御不快之趣此程西野入沢様承給候へハ肺病ニ被為罹、随分御重症之趣驚入候、何御不自由無御坐御土地柄之事御療養相届可申トハ奉存候得共、如何様御心配可被遊奉恐察候、御蔭居さまニも御心配之処御家事御多用之事ト奉恐察候、精々御保養御全快可被遊奉祈上候、右御見舞迄申上度如此御坐候、早々謹言

三月十七日 竹山龍保
池田謙齋様

尚々御国元入澤様ニも御全家は御機嫌克被遊御同慶奉存候、御蔭居さま無々御心配可（被）為遊、母も宜敷申上候、早々頓首

[79] 竹山^{たむろ}屯及び妻れつの書簡

① 竹山屯の書簡

竹山屯は幕末長崎精得館にて医学を学ぶ。県立新潟医学校々長。日新堂、後の竹山病院を設立。

屯の書翰は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に23通、日本医史学雑誌第51巻第4号・第52巻第3号第4号・第53巻第2号に39通掲載。これに未掲載分13通を加え合計75通は池田文書に於て最多の来信数である。これは屯の姉ただ(唯)が池田謙斎の兄入沢恭平の妻である事から、屯は新潟医学校や患者の相談の外に謙斎の実家入沢家の消息を詳しく知らせている事による。

63 明治()年9月16日 (1948)

拝啓、時下燈火稍可親之候、益御勇猛奉大賀候、陳ハ過般御手数願上候山崎月給相違候儀、早速御報被成下、御手紙ヲ以て県令へ談候処、直接ニ依頼いたし候ハ長与先生故、御同人より不日被申越候上、何れニもいたし可申と申事ニ御座候間、毎度御手数龜縮之至ニ奉存候得共御相談之上御同君より県令又ハ私宛ニて壺封之御投与被成下候ハ、山崎ニ於ても満足可仕と奉存候、東伏見之宮様之御染筆弔葉、関根え御托し被成下度候よし難有奉存候、同氏も昨日帰宅候よし近日出港と申事、同氏之御附法も私方へ直々御申送り被成下候よし申来候、御序之節御高按拝聴仕度奉頌御洩候、乍楮末御満堂様・長与先生えよろしく玉声奉頌候、草々拝具敬白

九月十六日

竹山屯

池田先生 翰史

64 明治16年6月29日 (3524)

拝呈、承候へハ貴下逐日御快方之由大慶奉存候、陳ハ愚案仕候処、当今ノ景況ニ依レハ新潟医学校ハ至急甲種ニ組立無之ハ来年ノ県会ニハ廃止可相成、今年右改正実地取行度モ外二名浅田・川股⁽¹⁾ノ両氏不拝見候テハ甲種ニ改良ノ由ヲ当夏休業前生徒ニ確報致兼候、故ニ目下生徒或ハ退校ヲ願ヒ、或ハ医学校甲タルカ乙タルカ、将タ廃止セラル、カト当惑スルモアリテ真ニ預後不良ノ徴アリ、此ノ患ヲ除カンニハ浅田・川股両氏七月十日前ニハ赴任有之度、若シ両氏至急赴任無之候へハ小生奉頌スルモ右勞無効ニ存候、此段御明察被下宜敷御取計之程奉願候以上、早々不備

六月廿九日

池田(欠)

(1) 浅田決・川俣四也男 いずれも明治16年東大医学部卒業。新潟医学校へ赴任する。

(注) 本書簡に署名はないが、筆跡・内容から竹山屯のものとした。

65 明治(17)年7月3日 (1958)

謹啓、時下薄暑之候ニ御坐候処、益御多祥奉拝賀候、陳ハ昨年梓五郎右衛門神經病ニテ御高診ヲ願候十日町病院監事根津五郎次氏、此度商用之序同郡病院院長実地家月給五拾円位ニテ雇入度ニ付添書被頼候間、御心当之仁も被為在候ハ、為御知被成下度候、尤も御多忙中右様拝願仕候も恐縮之至ニ御坐候得共、兼て敏子⁽¹⁾方へ書状ニテ申遣し置候得共、折角之依頼難黙止候、委細ハ同人より可申上候、大谷周庵氏⁽²⁾も当春来不快勝之処、同氏妻も子宮出血等発此度三週間之帰省願ニテ出京ニ相成候、兼て色々風説等も有之、且同氏ハ学力も優等ニテ当地ニても追々人望も可有之と奉存候間、帰郷之便ニテ辞職等ニも相成候得は別て心配之儀故、長倉⁽³⁾へ談し為見合為致度存候処、長倉氏ニハ兼て後來之約束も有之、右之手配ニ取極候事故如何共いたし候訳ニ不至、遺憾之事ニ奉存候、此上ハ速ニ快方帰校ニ相成候様仕度候、扱小生辞表之儀も再三内願仕候得共、不聞届候故、尚又暑中休暇中ニ再差出し可申と奉存候

一、行田君八十日計前ニ稍輕快之処ニ帰郷療養仕度被申、当分機那煎沃剥持長之筈ニテ候、帰候後別段容躰も承り不申候、悪敷事ハ有之間敷と奉存候、右御願迄、草々頓首敬白

七月三日

竹山屯

池田先生 尊閣下

(1) 敏子 池田謙斎の妹入沢かず(可寿。石田伊助に嫁ぐも後入沢に復籍)の長男 敏の事。

(2) 大谷周庵 明治16年東大医学部卒業。新潟医学校へ赴任。翌17年熊本医学校へ転任。同氏の書翰は日本医史学雑誌第58巻第3号に掲載。

(3) 長倉雄平 新潟県一等属・学務課長。竹山

屯の後任として新潟医学校長となる。

66 明治18年3月 日 (3638)
 本月三日之御尊書正ニ拝見仕候、残寒尚敵敷御坐候処、益御勇猛被為遊御起居奉大賀候、陳は敏子義段々厚以御配慮御説諭被下候処、漸歸国と決心仕候由、今町⁽¹⁾ニても定て大安心之事ニ奉存候、右ニ付てハ本人色々苦情も申上候趣、意外之事ニ御坐候、医学部え出仕又ハ増給、或ハ旧主君へ被服候等之節ニハ兼々先生之御高恩ニて目今之位置ニ至り、分外之事御坐候と多々申越居、此度御説諭ニて自己之不都合ヲ以て不顧大義とハ前言ニ反し候義と奉存候、如仰我促之事ニ御坐候、開業いたし候ても尽く入沢家ヲ肥し候了簡も有之間敷と被察候、今町ニても僅二人之子供故、達吉子⁽²⁾而已之為ニハいたし候訳ニも無之候故其辺も不懸念、十分尽力入沢家ヲ肥し、又相当ニ分与ヲ乞候方可然と被考候得共、兎角別宅養子ハ奉公人根性ヲ出し、為夫彼是面働ニ御坐候、弥歸国と決心仕候上ハ姉出京不仕候ても宜敷御坐候哉、開業後収入之儀ニ付てハ何とか粗取極置、本人も満足いたし尽力候様ニいたし度候、帰国之上不満ヲ抱候様ニてハ誠当惑ものニ御坐候間、夫是取極候ニハ矢張姉出京、先生之御一言ヲ御添被下候ハ、至極宜敷御坐候半と奉存候、同人貫候節ハ別段約束も無之候得共、宅之都合見計、別宅為致候見込ニて、為資本公債証書金高千円額面千弍百何十円か、同人へ遣事ハ嘶いたし、軍⁽³⁾之名前ニて其節求置候、其後尚不足故千五百円といたし候度、又弍千円ニいたし遣し候事ニも姉丈ケへ嘶いたし候、同人へ之恩義と申候も、貫候て直に当医学校へ明治十一年入学以来之学資ハ（衣類共）不残支給いたし置候、尤も卒業追々四五円之給ヲ取候事故其刻ニハ入費も多分ニ不相掛候得共、今日之位置ニ至り候も畢竟入沢家之為先生之御配慮も被蒙候訳ニ御坐候、器械代歸国前私方へ申遣候ても、追て之事ニいたし候様可申遣との考ハ何之為左様之事申居候哉、更々相分不申候、入用之品ハ在京中御求候方無論都合宜敷度と被考候、乍併今町ニ有之候品二重ニ相成候も無詮之事、御高案之通り今町残品取調不足分ハ相当ニ相求候方可然と奉存候、

何れニいたし候ても帰国後苦情（後欠）

- (1) 今町 竹山屯の実姉で、謙斎の亡兄入沢恭平の妻であるただ（唯）の事。新潟県今町（現見附市）に住む。
 (2) 達吉子 入沢ただの長男入沢達吉の事。
 (3) 軍 入沢ただの長女天野グン。入沢達吉の妹。
 (注) 本書簡に署名はないが、筆跡・内容から竹山屯のものとした。又明治18年頃入沢敏は今町の人達の熱望により空院となっていた入沢恭平病院を継ぐ事となる。

67 明治18年10月25日 (1955)
 (封筒表) 東京 池田先生 貴答 新潟 竹山屯
 (封筒裏) 封 十月廿五日
 拜啓時下秋冷之節、御満堂様益御多祥奉賀上候、陳は先般敏子歸国之節縷々之御懇書難有奉拜誦候、同人厄介ニ相成候佐藤周甫病氣も全治は仕間敷候得共、此比ニ至少シ稀粥ヲ食候位ニ至今般出立仕候、右ニ付周甫梓巴と申もの当院当直医相勤居候もの此度辞職仕候、周甫并ニ巴之意中ニては敏子ヲ巴之跡へ当院当直医ニ為致度存意之様子ニ御坐候得共、当仁後來之為ニハ少くも尚二年位御手許ニて実験いたし候方可然と存候間、其事之相談仕候、其内当院又ハ当国郡病院ニ三四拾円位之処も有之候ハ、為勤候てもよろしく、当院ニて勤務いたし候都合ニ相成候得ハ今町新発田ニても都合よろしくと奉存候得共、唯今直ニと申ても僅ニ拾五円か弍拾円ニては却て後來之名誉ニも関し可申候、依て同人勉強之為明年ニも相成下宿いたし度と申事ニ御坐候ハ、浅岡老人⁽¹⁾方ニても下宿為致度と奉存候、壮年之もの故悪友ニ交方向ヲ誤候等之事有之候ても遺憾之儀ニ御坐候間左様仕度候、何卒可然御教育被下度候
 ○今町送籍之儀は同人一旦実家へ復籍いたし候上、今町之送籍之都合ニ御坐候間、復籍願書此程差出不遠示令ニ相成候半と申事、其上送籍之都合ニ御坐候
 一、浅岡親子⁽²⁾事不浅御配慮被成下難有奉謝候、夏中兩人不快之節因却之余小生方へも辞職之相

談、老人へも申遣し生命ニ関候ては何事も捨置養生専一之事ニ御坐候間、辞職も可然と申遣し候事も御坐候得共、幸ニ兩人共全快いたし候得は向後も尚又身体ニ障候と申ニも有之間敷、且如御尊按開業仕候ても十分ニ不參節は又々風波ニ基ヒボヲ起候儀ニも立至り可申候間、先撰生ヲ専一として勤務いたし、兩三年之後少し資本之出来候処ニては幾重共いたし候方可然と奉存候、乍此上よろしく御添心奉希上候、右御報答迄忙中禿筆塗鴉御助誦被成下度候、当地之近況ハ敏子より御聞上被成下度候、乍憚御満堂様へよろしく玉声奉頌上度候、草々奉復

十月廿五日 屯 拜
池田先生 梧下

- (1) 浅岡老人 浅岡清旦^{きよあき}、屯の弟門は浅岡清旦の養子となり清と改名する。清は軍医。
(2) 浅岡親子 浅岡清旦・清の事。

68 明治29年4月11日 (1925)

(封筒表) 東京神田区駿河台北甲賀町九

池田謙齋先生 奉頌御自展

(消印 二九年四月一二日)

(封筒裏) 四月十一日 新潟市上大川前六^(オ) 竹山屯

(消印 四月一三日)

(本文欠)

尚々別紙認後、昨日夜ニ入帰宅仕候処、茂様⁽¹⁾御病氣之為行田様⁽²⁾御随行御出港ニ相成、同君より御容躰御申上候処、昨秋比より胃病ニて御法箋之薬用後、為差事も不被為在、其後荏苒経過致し候得共、敢て他医之診察も不被成御受、其比よりか時々安眠ヲ欠候趣ニて、晩酌後も枕頭耄纏ヲ備置御用ニ相成候事ハ殆平常位ニも御坐候哉、其比行田様へ御泊之節も同様之御事、尤も多量ニも御用無之、晩酌耄合余臨臥も同量位之由、冬ニ至り多少御精神之不常事も有之候哉も難計候得共、外見御心附被成候事ハ無之、一月ニ至不眠症も同様、事々物々目ニ触れ候些少之事迄御心配被成、其内お教様⁽³⁾御凶報等も幾分之感動ヲ増し、二月ニ至著敷事ハ無之も幾分か前症増し候御様子、三月ニ至候てハ手

紙も御認メ被成兼、健忘症加り新聞紙御覧ニ相成候ても御分被成兼候様子、本月ニ入候ては一層前症増進[三月中旬よりハ全禁酒被成候]昨夜望診仕候処[二三年来余程御肥満被成候処、一月以来少シ御瘦被成候と申事ニ御座候得共、尚兩三年前より幾分御肥満之方]顔貌異常も不被為在候得共、応接丁重ニ過ぎ言語低声時ニ渋滞、談話接続セス応答遅滞仕候得共、過半ハ相弁候得共健忘甚、一事ヲ再三御尋ニ相成候、又食事之度数等ハ更ニ御記憶無之、對話中手ヲ襟之辺口辺ニ触れ御挙動不常、風ヲ厭ヒ被成候得共、又時トシテハ外出被成度御様子も有之、併静肅之方拜仕候処、他覚症異常も無之、兩顎下腺少々腫脹致し居、咽腔ニ少シ加答兒有之、食慾ハ殆平常[時トシテ多量之事も有之候由]少シ便秘之方、頭痛眩暈等無之候、昨夜ハコロラル頓服臭剤差上候得共、如意御用ニ不相成、行田君之御心配ニて漸軽量ニコロラル御用ニ相成候、一二時間兩三度も御眠之様子、本日ハ別段御変も無之、右ニ付御在宅中之御相談ニハ御宅ニ居被成候てハ漸々前症増進被成候ニ付、出京治療か又ハ温泉場之閑静之処へ参り候方可然か、兎も角出港一応診断ヲ受、其辺も相談致し候上、先生へ申上候て御指揮之下何れ共進退ヲ御決し候事ニ御協議申上候、依て明朝行田君同君も学校へ御出勤故、引続御滞在被成兼候ニ付一旦御帰宅、西野へ御越し、明後日御内君看護ニ御越し候手配ニ被成候、其内御指揮之御返事到着之比(十六七日比)再出港被成候御積ニ御坐候間、何卒尔後之御進退早々御指揮被成下度、且御高按御教示被下度候、御容体も前後ニ記載仕候処多く、乱略御補誦被成下度候、草々謹言

四月十一日夜

- (1) 入沢家当主入沢茂の事。明治29年6月9日病没。享年48。
(2) 行田太郎 池田謙齋の4番目の姉行田八重子の長男。学校教師。
(3) 入沢かず(可寿) 池田謙齋の1番目の妹。石田伊助に嫁するも後入沢家に復籍。明治

29年1月頃死去。享年52。

（注）文中〔 〕は1行中に2行分かち書きした事を示す。

69 明治29年4月28日 (1954)

（封筒表）東京神田区駿河台北甲賀町九

池田謙齋先生 煩御自展

（封筒裏）封 四月廿八日夜 新潟市 竹山屯

（消印 廿九年五月一日）

廿五日御認之尊書正ニ拝誦仕候、五六日前おたをさま⁽¹⁾御出港被成下候て旧患漸相分、同夜尙封拜呈仕候、右ハ御状と引違ニ相成候、其節も粗申上候通り茂君之御容躰兩三日兎角御不出来之方、細君か餘り正直過候と申候半か御病人か間違言語動作を兎角真人人之如ク御返答被成候様之事柄多、時々衝突いたし候事も有之、其後嚴重ニ御説諭申上候故如何様被成候ても底抗等ハ不被成候得共、病勢之進候為ナランカ時々腕力ヲ出し被成候事有之、一昨日比よりハ食事も二度或ハ三度御用ニ相成候ても量減し、牛乳も容易ニ御用無之、薬用も細君之手にては御用不被成、家内共時々参り為呑み申上候ニも容易御用無之候得共、終ハ御用ニ相成候、本日ハーノ木戸おたつさま⁽²⁾御見舞且看護助ニ御越しニ相成候得共、殆細君同様様御叱責被成候て薬用其他困難被成候、然共家内共又ハ私参り候得ハ直ニ挙動鎮静被成候得共、薬用ハ彼是々と容易ニ御用無之候、右之御様子にて言語挙動少も常体ハ不被為在候得共、御内輪と他人え対し遠慮被成候御見分ハ尚十分被為在候

一、廿五日尊書中諸費云々之処、入御覧候ても御読被成候考等ハ無之候故、読て申上候得ハ誠御喜悅被成候得共、一時間も過候得ハ直ニ御忘れ被成候故、再御手紙ヲ読候て申上候と、其節ハ御悦被成候得共又忘れ被成候て、目今ハ何を心配被成候と申、取り留タル御心配と申事も無之唯目前之事而已多く、妻か精神か間違て居故私ニ対して不都合だとか申様之事多御坐候、右之次第ニ御坐候故、坐右之危険物等注意仕置候

一、数日便通不通之候様ニ御坐候得共、硫苦之頓服後宜敷相成候

一、御睡眠ハ十日余至て宜敷、兩三日ハ昼夜合算

仕候ハ、八九時も御眠ニ相成候故、沃剥合剤中之臭剥臭曾ヲ除キ少量之硫曾ヲ伍し差上候

一、汞^(水)恙四・〇之塗擦ハ連日施行仕候

一、催眠剤ハ兩三回之後ハ用候事申上候無之、御本人ハ不眠を御訴被成候得共、随分熟睡被成候

一、言語ハ不相変低声にて時トシテ耳ヲ傾テ聴候位之事ニ御坐候、右之御容躰乱禿前後仕候故、御判読被成下度候、兩陛下御病氣にて別て御配慮中少々ハ御軽快之御報も申上度と奉存候得共、何分前陳之御容躰如御高配追々多少御病勢相進候様子にて心痛仕候、尚御高案御洩シ被成下度御願申上候、草々頓首敬白

四月廿八日夜

竹山屯

池田先生 御侍史

尚々敏太君⁽³⁾も最早御出京被遊候半と奉存候ハ、不日御来着と奉存候、以上

(1) 池田たを（多越）池田謙齋の2番目の妹。池田伝吾の妻。

(2) 行田たつ 行田太郎の妻。

(3) 入沢敏太 入沢茂の長男。仙台にて医学勉学中。茂没後入沢家当主。

70 明治29年5月7日 (1951)

（封筒表）東京神田区駿河台北甲賀町九

池田謙齋先生 御侍史

新潟市上大川前六 竹山屯（消印 七日）

（封筒裏）封 五月六日夜

（消印 東京 廿九年五月八日）

肅啓、時下暖之和之節益御勇猛奉恐賀候、陳は五泉在船越村林恪太郎と申もの、昨暮頃一診其比心臟病にて第一音ニ騒鳴ヲ帯候様にて、鉄剤健質丁幾・纈草丁幾等相用候心覚之御坐候処、此度出京いたし先生之御高診奉仰度、就ハ添書いたし呉候様小生知人より飛脚にて申越ニ付御願申上候、罷出候ハ、御診察被成下度候、久敷診察不仕候、其節之証候附法等も確と覚ひ居不申候、本人より委曲御聞上被成下度候、右御願申上度、草々頓首敬白

五月七日

竹山屯

池田先生 梧下

尚々本日出勤中略封拜呈仕候、帰宅仕候処、西野御老母様⁽¹⁾御出港ニ相成候ニ付、プレウクハンド⁽²⁾三拾計取寄試用仕候処至極適當ニ有之、則御貼用ニ相成申候、御老人様御容躰も拜聴仕候処、下肢之水氣ハ全ク去り、其他も一般御軽快之御様子、腹部之水氣も無之様御嘶ニ御坐候得共、是ハ少ハ被為在候哉、確と相分不申候、池田傳吾様⁽³⁾も与板郡役所之書記ニ転勤、明後日任所へ御引越ニ相成、御老母様も御一集ニ御帰宅之御様子、乍序一寸申上候、御省念奉祈上候

- (1) 池田謙齋の実母 入沢はまの事。新潟西野村に住む。明治31年4月4日没。享年89。
 (2) プレウクハンド ヘルニアバンド。脱腸帯。
 (3) 池田伝吾 池田謙齋の2番目の妹たをの夫。

71 明治 年12月21日 (1921)
 (本文欠) 草々敬白

十二月廿一日 竹山屯
 池田先生閣下

尚々御隠居様并御奥様へ別紙拜呈可仕之処乍失敬宜敷玉声奉煩上度候、水原武者春道当院当直医二年斗相勤、其後高田病院長二年斗相勤、再新瀉病院当直医、其後新津病院長一ヶ年余相勤、尔後水原にて開業、可也流行仕候得共不相変大酒之所、本月二日俄然心囊炎〔去月初より少シツ、碍有之候様子〕兼加答児性肺炎にて、終四十一年ヲ一期トシテ九日死去いたし候、女子一人有之養子ハ漸当校之本科ニ入候位にて、家産之貯蓄も格別無之、氣之毒之事御坐候、乍序贅言仕候

72 明治 年5月5日 (1959)

肅啓仕候、時下新緑之候益御清榮奉賀上候、陳は今般正男⁽¹⁾独国留学仕候ニ付、為留別粗餐差上度候間、御多忙中乍御迷惑本月九日午後第五時半上野精養軒へ得御來臨之榮度、此段御案内申上候、敬具

五月五日 竹山屯
 池田謙齋様
 池田秀男様 御侍史

尚々御來臨之有無乍御手数七日迄ニ御一報奉煩度候

(1) 竹山正男 竹山屯の長男。

73 明治 年5月13日 (1937)

華墨薫誦仕候、過日ハ御多忙中蒙御來訪奉謝上候、正男弥明十四日前九時出帆仕候得共、本日後六時新橋発車にて神奈川一泊仕候事ニ御坐候得共、決て御構被下間敷何れ本人為致出發候後、御礼ニ拜趨可仕候、草々拜具

五月十三日 竹山屯
 池田先生 虎皮下

74 明治 年4月5日 (1961)

二日付之尊書正ニ拜見仕候、隣町出火早速御見舞被下、難有奉拜謝候、同日ハ相応之風も有之、殊ニ風下ニ御坐候得共幸ニ土蔵数棟隔居、水便も宜敷^(マ)蒸気ポンプにて早速鎮火、荷物之取仕舞も不仕候間、乍他事御省念被成下度候、扱先般は度々拜趨、御休息ヲ妨奉謝候、其後御感冒之由、随分度々同症ニ御罹り之御様子御困奉拜察候、小生も出立前感冒平卧、翌日出仕候得共、幸ニ道中無事廿日帰宅仕候、早速御礼可申上候処、普請等之雜事蝟集、為ニ御不音仕候段御海恕被下度候、奥様御避寒中突然昇堂失敬仕候、近比は御快方御帰館被遊由、乍憚宜敷玉声奉煩上度候、右乍延引御礼旁御報迄、草々敬白

四月五日 竹山屯
 池田謙齋先生 翰侍史

75 明治 年7月2日 (3345)

(端裏書) 池田先生へ
 (前欠) 畠山おまき二十七年、十三年前嫁候得共未ター子も無之、両三年より時々少々ツ、白帯下有之、月経前臍傍緊張等之諸症有之候得共、為差劇敷事も無之、一寸日帰ニ參、両三ヶ月目位ニ診察いたし、機那煎或ハ丁幾ニ臭剥莢若X等内用、アロエンタンニー子之腔注射、下腹部ニ沃丁等外用いたし居候得共〔近村の医師執匙いたし居候〕引続治療も不致候間、其低ニいたし居候、何れ

内膜炎或ハ頸管加答兒又子宮陰部之糜爛等も有之候半と存候得共、前条之次第にて未内診断も不施、幸此度出京ニ付御願申上度と之事故、篤内外御高診之上引統治療十分相施候様、御諭且御高案御教示被成下度候

○臍時々糜爛いたし候事も有之候得共、敢てコンジコマタにも無之、亜鉛花焦等にて治し候、或ハ喉頭ニ少加答兒有之候事も御坐候、自他本人罷出候節委曲御聞上被成下度候、扱同人は始て出京之事故、常人之見物不相成様之処、先生之御手蔓拜見出来候ハ、延寮館等拜見為致度と申事、此儀は浅岡老人へ依頼申遣し候間、御差支も無之処ハ同人え御申付被下度候

○追船便ニ粗品拜呈仕候間着仕候ハ、御叱留被下度候、右御願申上度、大忙中乱略御助誦被成下度候、恐々拜白

七月二日

(注) 本書簡には署名はないが、筆跡・内容より竹山屯のものとした。

② 竹山れつの書簡

1 明治（12）年1月10日 (1963)
 新年の御祝儀千里も同じ御事に御いらい申上まいらせ候、先以御皆々様御機嫌能御年重ねさせられ恐悦ニ奉存候、当方にも替なく候まゝ乍憚御案意被下度、扱昨年は始めて御光来之処余御龜末至極、且又産中にてなをさら不都合の御とりあしらい申上甚失敬の御事と存上まいらせ候、此度ハ御念に入見舞品々御送り被下有難拜し奉、尚時かふ御いとひあそはし御ふしの程ねんし奉る而已、申上度き事も拙筆にて心にまかせすそうそうめて度かしく

一月十日夜認メ

尚々御送りの品々当十日の夜ふしにて相届き候まゝ一寸申上候

↗

東京にて 池田奥方様 御元え

新潟 竹山連津⁽¹⁾

↗

(1) 竹山連津 竹山屯の妻れつ

[80] 田澤敬輿の書簡

田澤敬輿は嘉永6年生、北海道士族。明治12年東大医学部卒業。明治18年12月より30年6月迄侍医を勤める。

1 明治 年4月9日 (1969)

(封筒表) 池田先生 御侍史 田澤敬輿 拜
 (封筒裏) ↗

謹誦、一昨日小妻負傷致し候義ニ付早速御見舞被下難有御礼申上候、右は種々取込タル情実も有之候ニ付近日参上御礼旁可申上候へ共、不取敢乍略儀以書中御礼申上度如此ニ御坐候、早々頓首

四月九日 敬輿 拜

池田先生 梧下

[81] 田代文基の書簡

詳細不明。書翰の内容より医師と推定した。

1 明治 年9月20日 (1970)

益御清祥被為在奉恭賀候、先日来御配慮被成下候長岡公病状一回御報道致候通にて已ニ東京以来六日間ニ相成、未タ脈数百以下ニ減シ不申、通例脈至百ニテ僅カ食事浴湯等ニ由テ直ニ百十位ニ加ハリ申候、聴診打診ニハ異状ヲ認メズ其他著シキ證候無之只脈数脚弱ナルノミ、前方硝石苦塩^レ壺^レ丁^レ幾ノ下劑連用、東京以来已ニ七八日ニ及ヒ、尚兩三日ハ連用可致相考候得共爾後脈搏依然不減之時ニ至リ姑ラク水楊酸二十グレイン、丸之方ニ転シ可申哉、將タ他ニ何ソ御高案被下間敷哉奉候、尤是まで一日ニ四五行宛快利有之候、十日以上ニ及ヒ候ても脈搏減シ不申候ハ、尚下劑連用可仕哉、為念奉伺置度御懇劇之内奉恐縮候得共、何卒御教示被下候様奉願候、恐々謹言

九月廿日 田代文基 再拜

池田大先生 閣下

[82] 田代基徳の書簡

田代基徳は医学ジャーナリストを経て陸軍々医監・陸軍々医学校長を勤める。基徳の書翰は『東

大医学部初代総理池田謙斎』下巻に3通掲載に付き省略。

[83] 田代^{よしのり}義徳の書簡

田代義徳は田代基徳の嗣養子で、明治21年帝国大学医科大学卒業。整形外科学の創始者。義徳の書簡は田代基徳との連名にて『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に1通掲載に付き省略。

[84] 多田新の書簡

詳細不明。書翰の内容より医師と推定した。

1 明治 年12月30日 (1984)

昨日は尊状御投し被下難有奉拜誦候、拙子(欠)尔後之御疎濶奉恐縮(欠)、陳は本田恒長事四五日前診察仕候処例之輕微感冒にて些少之咳嗽のみ、依て民精一ドラクマ半・カミツレ浸三オンスノ者相投し、然ニ夜臥之節盜汗有之候趣、尤も体温脈状及咳嗽等は更ニ平常ニ異ならず、前方相用、其後咳嗽少々増加且本人頻ニ発汗剤服用ヲ相嫌候、依て前方相転し民精一ドラクマ半一グレイノーオンスト吐根浸二オンスニ単舎利別相加一食匙ツ、三時毎ニ服用せしむ、昨廿九日ニ至リ咳嗽相減少且精神頗快、殊ニ本人運動ヲ望ミ候ニ付外出相許し、尚前浸持長(欠)卅日夜診察之処体(欠)且他異常(欠)共咳嗽昨々比(欠)増加、尤も本日之(欠)出等大風中之事故相障候事と奉存候、就ては年末と申御多端奉察候得共、御序も被為入候ハ、御光駕之(欠)置尊論給り度(欠)偏ニ奉希上候、本人義(欠)候間御高論希(欠)候義ニ御坐候、右懇願迄如此ニ候、文意疎略不悪御

高免願敷奉存候、余は御光臨之節縷々、頓首拜啓

十二月卅日

多田新

池田先生 閣下

追て本人不快ニ付是非先生へ可願出候様申聞候処、先生ニは御所勞中故依て配薬可然様本人より被申聞候間不得止承諾仕候、呉々御尊論ヲ相蒙段貴慮(後欠)

[85] 橘良侘の書簡

橘良侘は東京医学校卒業。大阪府立医学校長。明治16年8月22日没。享年35。良侘の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に1通掲載に付き省略。

[主要参考文献]

- 朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社 1994年11月30日発行
池田文書研究会編『東大医学部初代総理池田謙斎』上・下巻 思文閣出版 2007年2月25日発行
日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館 1981年9月10日発行
吉田忠・深瀬泰旦編『東と西の医療文化』より遠藤正治著「明治期の侍医制度と池田文書」思文閣出版 2001年5月11日発行
大植四郎編『明治過去帳』東京美術 1971年11月20日発行
稲村徹元・井門寛・丸山信編『大正過去帳』東京美術 1973年5月15日発行

(本稿に於いて詳細不明の医師 田代文基・多田新に就きご知見のある方は順天堂大学医学部医史学研究室までお知らせ下さい。尚 外浦文徳に就いては判明しましたので後日補記します。)